

平成 27 年度 第 3 回社会教育委員会議概要

- 1 日 時：平成 27 年 11 月 11 日（水）10:00～12:00
- 2 会 場：小田原市役所 議会全員協議会室
- 3 委 員：木村議長、中村副議長、有賀委員、荻野委員、佐久間委員、笹井委員、高橋委員、土田委員、深野委員、益田委員
- 4 職 員：諸星文化部長、安藤文化部副部長、杉崎文化部副部長、友部生涯学習課長、大島文化財課長、古矢図書館長、川口スポーツ課長、石井青少年課長（事務局）
大木生涯学習担当副課長、高橋生涯学習係長、渡邊主査、田中主事
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

1. 挨拶

諸星文化部長が挨拶をした。

挨拶のなかで、来年度以降、総合計画の後期基本計画の策定に入っていくにあたり、財政状況が厳しい中で生涯学習施設を含め公共施設を今後どうしていくかという問題があること、また、今回の総合計画の大きなテーマである地域コミュニティ単位での持続可能なまちづくり、市民主体のまちづくりの推進に対して生涯学習の分野では何ができるかというところが、今回の答申の 1 つの大きなポイントであると説明した。それにむけてキャンパスおだわらという枠組みの中で生涯学習を展開しているが、それを地域で展開する場合にどうするかが重要であり、例えば従来の講座形式ではなく、参加しやすく新しいコミュニティが生まれるような講座も考えている旨を説明した。

【木村議長】 議事に入る前に報告だが、今月の 8 日、9 日にコミュニティの関係で富水地区の住民 35 名で新潟県柏崎市を訪問した。柏崎市には 31 の各地区にコミュニティセンターが建てられている。話を聞くと、コミュニティセンターは原発交付金で建てたとのことである。柏崎市は昭和 41 年に国による地域コミュニティのモデル事業を開始し公民館を進めていたが、手狭になり原発交付金がもらえるようになったので、コミュニティセンターを建設したそうである。センターは基本的に鉄骨鉄筋造りで、最も立派なものは 4 階建てであった。コミュニティセンターには、センター長 1 名と事務員 2 名が専属でいる。（管理運営は？）地域に任せており、町内会長が当たっている地区もあるし、他の人をお願いしている地域もあるが、いずれにせよ相当の人件費がかかっている。原発停止にあたり、（お金の関係で）苦慮しているそうである。最終的には、センターを建てたことが良かったのか、昔の公民館のままで良かったのか分からないそうだ。小田原市の話も聞かれたので話した。小田原市にはコミュニティセンター（タウンセンター）が 3 館あるという話に対して、それは市内を網羅し

ているのかと聞かれたので、網羅はできていないと答えた。また今後新しく建てる予定はあるのかと聞かれたので、そのような大型の施設は今後作られないだろうと答えた。(場所についての) 解決方法を聞かれたので、段々と少子高齢化が進んでいる中で、学校の空き教室が出てくるので、今すぐという話ではないが、できれば学校をコミュニティセンターに代わるものとして、1つの教室を誰でも使えるような形にすることで、建物を建てるよりは改修費くらいで済むのではないかと答えた。それが小田原市の方針かと聞かれたので、それは私個人の希望であり、お金をかけずにやっていくにはその方法が良いと考えていると説明した。

地区公民館についても聞かれたので、地区公民館は古くなっているが、建替えには住民の寄附や積み立てが必要あること、それを考えると地区公民館は地区公民館で残しながら、学校を拠点としていくのが良いのではないかと答えた。

小田原市の現状は、今後タウンセンターを整備することはできないので、どうすべきかを皆で考え、どこかに拠点を作るならば、学校の空き教室が良いと考えているが、地区公民館は地区公民館として残していけばよいわけで、集まれる場所が必要である。なるべくお金をかけずにできる方策を考えていくと長続きするのではないかと答えた。

2. 報告事項

(1) 社会教育事業の結果及び予定について（平成 27 年 8 月～平成 28 年 2 月）

資料 2 に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。

【図書館長】 前回の会議の際に、図書館は生徒の体験実習やインターンの受け入れが多いという話をさせていただいたので、26 年度の実績の数字を報告したい。昨年度、体験学習で実際にカウンターに入り図書館員のようなことをやったり、インターンシップや学校の先生の研修等により、体験として受け入れたのは、通算で 58 日間あり 55 人であった。見学に限っては、小学生を中心に学校単位などの見学もあるが、12 団体あり 496 人の方に来ていただいた。27 年度は 10 月までの実績で、37 日間職場体験等を受け入れている。夏休みに限って言うと 28 日間、受け入れていた。10 月までの受け入れ人数は 15 人だが、今後も予定は入っている。今年度は小学校に依頼を受け、こちらから出向いて図書館についての話をする機会もあった。これ以外にもフリーで申し込みを受けて図書館体験をすることもある。以上ご報告させていただく。

【有賀委員】 生涯学習課の 10 月 24 日、25 日開催の生涯学習フェスティバルは、2,696 人とかなり参加者が多かったように思えるが、これは来場者数と捉えてよいか。

【生涯学習課長】 そのとおりである。来場者数でカウントしているのので、一人の人が 2 つの部屋（ブース）に行った場合は、2 人とカウントしている。

【有賀委員】 体験に限らず、舞台発表なども含め、来ていただいた人の総人数というこ

とで捉えてよいか。申し込み制をとっているわけではないので、人数の把握方法を伺いたかった。

【事務局】 今申し上げたとおり、各部屋でそれぞれカウントしている。なので、一人が3部屋回ると3人というカウントになってしまう。ユニークユーザーというか純粋な来場者となると、その5分の1とかになると思うが、そこまでは把握していない。

【有賀委員】 この人数は例年通りか。

【事務局】 ほぼ例年どおりである。

3. 協議事項

(1) 答申について

生涯学習課長より資料2から資料6に沿って説明をした。

【木村議長】 資料4を中心に皆さんで議論いただければと思う。それについて、1ページから順番にやるか、自由に討論するかどちらがよいか。

【生涯学習課長】 1ページからやってもらい、そのやり方がうまくいかなければ自由討論という形式にしてもらえればよいと思う。

【木村議長】 それでは資料4の1ページの「はじめに」から進めるので、これについて発言をお願いしたい。

【中村副議長】 4つ目の「学びとは・・・」のところで、「自己実現を通して人生を豊かにするもの」というのは確かにそうだが、最初に部長の話でも総合計画の話や財政状況が厳しいという話を聞くと、生涯学習や社会教育のお金をもっと欲しいと考えるならば、自己実現だけが学びであると受け取られるところが問題であり、学ぶことは自己実現だけでなく、社会実現やまちづくりにもなるということをここできちんとおく必要がある。そうでないと、個人の学びにそんなに税金を投資できないになってしまうと思うので、ここをきちんと書くべきである。

【生涯学習課長】 ご発言のとおりである。ここで言いたかったのは、まず自己実現したことによって、その波及効果として個々の人たちが豊かになれば、地域としてもうまくつながっていくのではないかと、というイメージで書いたが、言葉が足りなかったかもしれない。

【中村副議長】 もっとインタラクティブ（相互作用や双方向性）な関係である、というような感じに書いてもらえると良い。

【佐久間委員】 「学び」は「生きることそのものであり、自己実現を通して人生を豊かにするものである」とあるが、生きることそのものが自己実現ととらえられてしまい、学ぶ人のニーズが精神的報酬がメインなのかというイメージを持ってしまう。しかし、生きることそのものには、経済的報酬も当然入ってくると思われるので、その部分にも言及したほうが良いのかなと思う。

【木村議長】 他になれば、「1. 地域における学びの場をとりまく現状 (1) 社会教育

関連施設」に進みたいと思う。何か意見はあるか。

【深野委員】 「多目的（無目的）」は、多目的と無目的という意味として全然違うことがあえて括弧で書いてあるが、何か意図があるのか。無目的と書くと勝手に使っているというイメージがあるので抵抗があるから、多目的という言葉にしているのかなと感じるのだが、別の書き方がないのかなと思う。少し分かりにくい。

【生涯学習課長】 ここで書きたかったのは、いわゆる縁側的と言う意味で、特に目的もなく集まることによってもコミュニティが生まれ、それがひいてはまちづくりにつながる、あるいは学習につながっていくというご意見を前回いただいたので、書かせていただいたところであるが、無目的と多目的では意味が違う部分があるので、表現を考える。

【深野委員】 無目的という言葉が少しマイナスイメージが強い気がするので、“気楽に”とか“目的が無くても集まる”と言う表現にしたほうが良いと思う。

【生涯学習課長】 そのような趣旨で表現を考えたい。

【木村議長】 「1. (2) 地域における学び」に進みたいと思う。

【益田委員】 キャンパスおだわらというのは、小田原市全体での学びという意味だと思うが、キャンパスおだわら情報誌に全ての情報を載せる、という冊子の話をしているのか？

【生涯学習課長】 そういう趣旨ではない。

【木村議長】 「1. (3) 地域コミュニティ」については何かあるか。これは地域の取組みもあると思うが、先ほども言ったように柏崎市では、まちなかと田舎で人口構成が全然違う。まちなかは子どもが多いが、田舎の方では、8割くらいが老人で、小田原市もだんだんとそうなると思うが、小田原市が学校の空き教室を使いたいと考えているという話をした際に柏崎市のかたが「それはいい。老人がそこへ集まると子ども達と触れ合う機会ができるのではないか」という話もしており、それが良いかどうかは分からないが小田原市も何年か経つとそういう現状が出てくると思う。何でも学校を開放しろという話ではないが、地域の人が入ってくるなど、学校を中心に地域コミュニティの関係ができてくると一番良いのかなと私は考えている。そうすると子どもも大人もお年寄りも1つの場に集まれる。コミュニティセンターをあちこちに作ることもないし、そういうやり方のほうが学校にいつでも集まれる。セキュリティ問題は考える必要があるが、地域に学校があるという事を活用する。地区公民館は地区公民館でまた別に活動目的があるので、いろいろなやり方があっていいのかなと思う。

あくまでもコミュニティの拠点は小学校であるという位置付けができて、誰でもそこへ行っていろいろなことができるという方向になると、保護者のかたにも来てもらえるのかなと思う。

【深野委員】 いろいろな年代層が集まる場が地域コミュニティには重要である。例えば、

どんど焼きがそういう場であると思う。おじいちゃんが孫を連れて来たり、仕事の終わったお父さんが来たりなど、いろいろな人が集まってこられる場だった。なので、地域コミュニティに年代層や男女問わず老若男女、という観点を書き込むと地域コミュニティのイメージも膨らむのではないか。それを実現する 1 つの手段として学校があるのではないかという捉え方で良いのではないか。

【益田 委員】 学校に集まるというのは良い事だと思うが、小学校区と地区の範囲が違っていることが問題であると思う。避難訓練をしてもその学校の地区ではない人も来たりするので、地域コミュニティ＝小学校区となっていたほうがすっきりすると思う。その点についても考えてもらえるとありがたい。

【生涯学習課長】 区域割りについてここで結論を出すのは難しいが、国の中央教育審議会でも学校と地域の連携を推進する方向で動いているので、これから時間はかかると思うが地域と学校、特に小学校との連携は具体的に動いていくのではないかと考えている。

【荻野 委員】 地域の中で小学校を占める位置が重要になってきているというのは私も認識しているところであり、地域の中の学校という意識をもって学校運営に取り組んでいるところである。小学校は防災の拠点にもなっているので、地域の方が学校に自由に入出りできるような環境を整えていくべきであると考えている。東京のある学校では、学校の中に公民館施設を作ったことによって、生徒と地域住民が交流を深めることができたという話を聞いたことがある。ただ、小田原市では空き教室ができるかもしれないが、学校はふだん教育活動をやっているわけで、そういう中で空き教室ができたから地域の方に開放しようとなっても、集まる時間帯がいつなのか、どういう目的で集まるのかや、セキュリティの問題等もあるわけなので、答申に書くかどうかは別として、その辺りの部分をしっかりと考えていく必要があると思う。

また、防災拠点になっていたり、地域コミュニティと関わる部分がある中で、学校が事務局機能を担わなければならない部分が増えてきており、本来の学校としての業務に支障が出てきてしまうこともあるので、人的な配置など、そういうようなことをやってもらえる人を手当てすること等も考えてもらいたい。

【中村副議長】 「1. 地域における学びの場をとりまく現状」は課題について述べていると思うが、もしかしたら「(3) 地域コミュニティ」を (1) に持ってきて、地域コミュニティを作ることが大事であるということ、防災等も地域にとっては大事であるということを最初に述べ、そういう地域の学びが大事である中で、地域の学びはどうなっているかと言うと、学校も必要であるという事を (2) に書いて、最終的に社会教育関連施設はどうなっているかと書いたほうが、社会教育の課題は見えてきやすいし、全体の中での社会教育という位置付けにはなるのかなと思う。順番を逆にしたほうが分かり

やすいと思うがどうだろうか。

【生涯学習課長】 ご発言いただいたとおり、全体の中から絞り込むというか狭めていくという組み立てのほうが組みやすいかもしれない。実際にやってみてまたご判断いただくことになると思うが、そういう視点で組み直してみたい。また「1」全般に学校や防災との関係の現状も具体的に入れていく。

【木村議長】 では、「2. 地域における学びの場を考えるための視点」に進みたいと思う。「(1) 学習意欲を喚起する」から議論をお願いしたい。

【笹井委員】 5つの視点から考えるという書き方は賛成だが、(1)に入る前に、なぜ5つの視点が出てきたのかを説明しておく必要があるのではないかと。要するに地域における学びの場の意味論みたいなものが必要だと思う。5つの視点についてはそのままが良いが、その前段に意味論みたいなものが必要である。これは私の意見だが、小田原市みたいに地区公民館が充実しているところで、日常生活の中で皆が気軽に集まれるような縁側的な場が必要であるとこれまでも申し上げてきたが、それは学術的に言うと社会参加の場になる。今現在働いている人や子育て中のお母さんはなかなか社会参加の機会がなく、パートナーが亡くなった高齢者のかたも家に閉じこもりがちだと考えると、そういう人たちが集まれる場が必要で、それを今の時代は社会参加と言うのではないかと思う。社会参加だから、ここまで日常生活に広がっている地区公民館が大事である。だから、そこでもっと出会いの場や集いの場が必要であるというように、次の(1)からにつなげるようにすることが大事だと思うので、社会参加という意味を持つところであり、人間関係づくりや人と人がつながる場であり、その中で自分自身を向上させたり自己実現するという3点がセットになると、地域そのものが豊かになる、活性化する、地域づくりにつながる、という文章があると分かりやすいと思う。

【木村議長】 私の地区では高齢者のお茶会をやっているが、笹井委員がご発言したとおり、一人でずっと生活している高齢者はいくら誘っても出てこない。なので、今は75歳以上のかたを対象に、ご夫婦で来てくださいと誘っている。そうしてその中で輪ができてくると、もし夫婦のどちらかが亡くなって一人になっても、地域に仲間がいる。お年寄りなかなか外に出てきてくれないので、ご夫婦で健在の頃から輪の中に入れてもらうことで、一人になっても「あの人がいるから」と出てきてくれる。生涯学習もそうだが、まちづくりもただやればいいのかではなく、模索しながらどうしたらいいか、どうすれば出てきてもらえるかを考えながらやっていかなければ長続きしないので、リーダーとなる人、トップになる人が色々考える必要がある。地域の課題やまちづくりの取組みはやっていく中で考えていくことから、こうしなさいというのではないと思う。

【中村副議長】 縁側や社会参加の場、関係づくり、自己実現というのは、「1(3) 地域コミュニティ」の①～③に当てはまる気がした。社会参加の場と関係づくり

と自己実現が結局はまちづくりや防災になるという位置付けにして、そういうことをしていくのが小田原にとって大事であり、では実際に地域ではどういう学びの場があるのかということで、「(2) 地域における学び」がきて、学校のことや社会教育の場のことを書き、その次に社会教育関連施設やこういうものがあるという「(1) 社会教育関連施設」がくる。

そういう書き方をすれば、「2. 地域における学びの場を考えるための視点」の最初のところでもう一回社会参加の場とかを書きやすくなる。そこでつながっていくと思うが、どうだろうか。

【生涯学習課長】 社会参加は第一歩だと思うが、それを社会参加と銘打ってやると出てこない人もいるし、高齢のかたも若いのかたも、社会参加は嫌だと思ってる人もあると思うので、今考えているのは“何か面白そうなことをやってそうだから顔を出してみようかな”というレベルから始まり、気づかないうちに社会参加している、というきっかけを行政がある程度作らなければならないということだが、それが次第に行政が入らなくても地域で回っていくようなレベルになるのが一番良いと考えている。

【木村議長】 富水地区ではフェスティバルを開催しており、幼稚園児や小学生に何かやってもらっている。すると親が来るので、1回に2,000人くらいの人に来て、いろいろなものを買ったり食べたり飲んだりしてくれる。一番良いのは子どもを主体にすることで、そうすると必ず親が来るので、1つの仕掛けとしてお子さんがある程度ターゲットにしてやっていき、その中から良さそうな人を引っ張ってくるなど、いろいろなやり方があると思う。

【佐久間委員】 先ほど議長が高齢者のお茶会について、どうしたら参加してもらえるかという話をしていたが、私は出てこない人はお茶会にニーズを感じていないと考えている。メリットよりも面倒くさいとか行くのが大変というデメリットのほうが大きいので、それは「(1) 学習意欲を喚起する」のなかの学ぶ側のニーズとも関わってくるのではないかと思う。骨子の中にもニーズ把握とあり、ここを考える必要があるが、ぼやけている。課題のところに学ぶ側のニーズを把握するということを方法なども含めて書く必要があるのかもしれない。

そもそも学ぶきっかけとは何かということを考えていて、それは「はじめに」で書いてある精神的な報酬、すなわち自己実現欲求、貢献欲求、所属の欲求、いきがいややりがい、交流やつながりが欲しいと思いを満たすために社会参加することと、経済的な報酬、すなわちお金、スキル、履歴書に書けるような経験を得るために行うものがあり、それを満たしてくれる公的なものと民間のものを考えると、公的なものは職業訓練所やハローワークの職業訓練があり、民間のものは専門学校やセミナー、カルチャーセンター等があると思う。後ろに出てくる「さまざまな理由によりこれまで学びと関わりのなかった人たち」とからめて考えると、公的な職業訓練所では対象が限定されていたり、ハードルが高かったりして参加しづら

い、一方民間の方では、専門学校は費用が掛かる、どんなセミナーをやっているかという情報が取得しづらい、カルチャーセンター等は仕事に直結しづらい等があり、この狭間にいる人たちが、具体的にどういうニーズを持っているかをもう少し知っていけないといけないと思う。

【生涯学習課長】 ニーズの把握は非常に重要であると認識しているが、一方で非常に難しい面がある。特に能動的に学習したいと思う人に対してアンケートをとるのは割りと簡単なのだが、そう思っていない人がどれくらいいて、その人たちに理由を聞く方法は難しいのかなと思う。しかし出てこない人は出てこない人なりの理由があると思うので、そういったサイレント的なニーズをどう把握するのか、それは難しいと思うが何らかの方法で収集して得られればと思う。

【佐久間委員】 難しいのはそのとおりである。しかし分かること（把握していること、出てきている人）に対しては公的でも民間でも何らかの施策をしているが、だからこそ出てこない人たちが埋もれていて、誰かが着手しないとそれはそのままになってしまうので、その部分が何とかできないかなと前期から考えている。

【生涯学習課長】 課題としてその辺りをうまく書けるようにしたい。

【笹井委員】 今のところに関連して、ニーズや価値観が多様化しているので、アンケートで把握するのはかなり難しいと思う。私が思うのは、地元で同じ目線で生活している人たちがいるわけで、そういう人たちから話を聞くことは意外と遠回りに思えて早いと思う。行政がやるとどうしてもアンケートとかになってしまい、その方法では聞ける量や項目に限られるが、実際に同じ共同体で生活している人たちからヒアリングすると、その人たちが何を求めているかや課題意識、これから何をやりたいかなどが何となく分かるのではないかと思う。

【木村議長】 まちづくりとかコミュニティづくりは地域に任せないとダメだと思う。行政が口を出すのではなく、自分たちで考えて自分たち地域目線で見てやっていかないと、行政から口を出されても誰もやらない。自分たちで考えているから続くと思う。だからそれはやはり地域目線で、地域のことは地域の皆さんが知っていると思うので、そういう人が集まって自分たちのことは自分たちで考えるという意識でやると、良い方向に行くし、それがやはりコミュニティの良いところであり、まちづくりの良いところである。

【中村副議長】 「2. 地域における学びの場を考えるための視点」全体で思ったのは、(1)～(5)がどこの地域でもあると思うので、タイトルを工夫して全体のタイトルを小田原らしいものにしたほうがいいのか。また、楽しめるような学びや自己実現だけではなく、それを社会に還元していくような循環型みたいなものを書けるといい。そうすると、例えば直接経済には結びつかないかもしれないが、社会の中での役割が見えてくる

のではないかと言う気がした。承認されるような、とか、生かされるような場、みたいなことを書けると良い。

【木村議長】 時間もあまりないので、「2. 地域における学びの場を考えるための視点」全体について気になる点があったらご発言をお願いしたい。

【荻野委員】 「(5) 次世代を育成する」の仕掛けの2つ目「まちづくりに学校も参加する」という部分で、学校教育と社会教育はそれぞれ独立したものであり、学校教育の中でも郷土学習や地域の中でこれから子ども達が生きていくための教育をとすることは言っているのに、まちづくりに学校も参加するという趣旨については異論はないが、社会教育委員会議の骨子の中に「学校も参加する」と位置付けられてしまうと、学校教育の独自性ということもあるので、少し戸惑いを覚える学校もあるのではないかと。むしろ社会教育の視点から学校をどう巻き込んでいくかという部分で捉えていけないといけないと思うので、例えば「学校も巻き込んだまちづくり」とか、社会教育の立場として学校をどう取り込んでいくかという視点で書いていただいたほうが良い。

【生涯学習課長】 この部分については事務局でも悩んでおり、確かにここまでストレートに書いていいのかと思いつつも、仮に書かせてもらったが、今いただいた話を踏まえて適切な表現を考えさせていただく。いずれにせよこれは骨子なので、全体を通して明らかに抜けている視点やおかしい点等があればこの機会に教えていただきたい。

【木村議長】 荻野委員のご発言のとおり、この書き方がだと学校がやらないといけないととらえてしまう。富水地区では、中学生がフェスティバルをやるときにお願いすると生徒が出てきてくれるが、そういう関係で良いと思う。もう少し柔らかい表現にできればいいのではないかと。最終的には学校を拠点として考え、本当にそうなったときに学校側と話し合えば良いと思うので、あまり今からこうしなさいという内容にしない方が良いかもしれない。

【生涯学習課長】 ハードの拠点として学校の重要性は揺ぎないものがあるので、その辺りを踏まえた上でどこまで書けるか考えさせてもらいたい。

【有賀委員】 「(5) 次世代を育成する」の仕掛けの「学校、地域、家庭の連携により子どもを育てる」に関して情報提供になるのだが、小田原市では地域ぐるみで子どもの育ちを支える体制づくりとして、公立の幼稚園、小中学校を対象に学校支援地域本部事業を実施している。その中の重要な取組みの1つにスクールボランティアの充実・推進が挙げられ、学校現場では地域における体験活動を中心とした学習をとおして豊かな心や地域や小田原のよさを学んでいる。【必要となる場】に、「地域ぐるみで子どもを育てる場」として「小学校が中心となり」とあるが、中学校のほうも考えに入れいただき、「学校が中心となり」としても良いのかなと思った。

また、その下の【現状の場】の放課後子ども教室について、酒匂小学校の放課後子ども教室について情報提供したい。酒匂小学校放課後子ども教室

は開設して4ヶ月が経過し、活動も定着してきた。今回、子ども教室の保護者宛に作成した便りを資料として配らせていただいたが、現在9名のスタッフで仕事を分担して行っている。約40名の子ども達が参加しにぎやかに過ごしている。課題や読み聞かせなどを取り入れながら活動を進めている。また小学校のすぐ近くに酒匂・小八幡地区のふれあいサロンがあり、先日代表のかたと話をし、以前から交流の話が出ていたが、今後お年寄りのかたとトランプや折り紙などの一緒に活動できる機会を考えていきたい。

【深野委員】 2点意見がある。1点目は感想に近いのだが、「(1) 学習意欲を喚起する」で、意欲を喚起すると言うが、高齢化社会に向かっていく中で、人間は若いうちにはのどが渴けば水を飲みたいと思って水場に集まるが、年を取ってくるとのどが渴かなくなってくる。意欲がわからないし、わく必要もない、ということもあり、そういう人をどうするのかと思う。でもやはりぬくもりや幸せでありたいというのは一生変わらないと思うので、その辺りが切り口になり、意欲を持ってもらう手段とするのかなと思う。ニーズの話というと、年寄りはニーズがないという話になってしまうので。

2点目は、「(3) 郷土愛を育てる」で、郷土の範囲をどう考えるのか聞きたい。私は桜井地区なので二宮尊徳という郷土の偉人がいるが、二宮尊徳は小田原の偉人とも言える。小田原には北条幻庵という人がおり、幻庵は北条五代の中にあって文化形成において重要な役割を果たした人である。久野に幻庵屋敷跡があるが、久野の人たちは幻庵のことをどう思っているのか、久野以外の小田原の人が幻庵についてどう思っているかは分からない。一方で幻庵の遺品や関連資料が小田原城の中に保管されており、点で資料はあるが、全体のつながりがなく、郷土愛を育てるための点を結びつけるような動きが必要である。小さな地域、すなわち学校区での祭りのことをここでは言っているのか、それとも小田原市という範囲なのか、さらに言えば箱根も含めた足柄平野というより大きな郷土をイメージしているのか、そこが曖昧である。文章で言うとそれぞれの地区の郷土愛というイメージで書いているのかなと受け止めたが、だとするとより広域での郷土愛は必要ないのかなと思った。

【生涯学習課長】 意欲がなくなるということについては、確かにそうだが、では意欲がないなりにどこまで出てこれるのか、逆に意欲のある人をどこまで引っ張り上げられるのか等レベルの違いがあると思うので、その辺りを考慮しながら施策を考えていかねばならないと思うし、地域と一緒に考えていく必要があると考えている。

郷土愛の範囲については、ここでイメージしているのは基本的には生活している地域、桜井地区でいう二宮尊徳、というイメージで書いている。逆に桜井地区のかたが北条氏を学んではいけないかと言うと、そういうつもりではなく、それを否定するものでも排除するものでもないが、基本的

には身近な範囲の郷土愛をイメージして書いている。もっと広い意味で小田原市全体のシンボリックな北条五代について分けて書く予定はないので、ここではまず地域の、しかも郷土愛なので必ずしも郷土芸能や郷土の偉人の話だけでなく、住んでいるところが好きだというレベルでも良いと思うので、そういうところからまず郷土を愛する気持ちが出てくれば良いと思う。

【文化部長】 今の話は、ニーズの把握だけでなく、地域でのいろいろなつながりのなかでそういう人をどう連れてくるかという誘いをするというところが一番のポイントになると思う。そこは行政は引っ込んでいこうという話で、行政が出て行く場面ではなく、地域の関係性が築かれていく中でそういう人たちに意識的に、ことあるごとに声を掛ける。これは福祉や防災の分野でかなり行われており、今の地域では個人情報に関わる話なので扱いが非常にデリケートではあるが、それぞれの地域でそれを乗り越えて合意を形成し、どこの家にどんな人がいるかという情報を自治会長はほぼ把握しており、民生委員と共有して、いざという時にはその人を率先して助けに行こうといったことが、恐らくどの地域でもできつつあると思う。それが生涯学習の世界でも同じように考えられるのではないかとこのころで、そこを福祉であるとか生涯学習であるとかではなく、こういう話は地域の結びつきの中で解決していくべきであり、それが市民主体でやるとか、地域主体でやるということの意味なのではないかと思う。それを行政がやろうとすると膨大な労力が必要となる上、警戒されてしまいきなくなると思う。郷土の範囲については、前期の答申では小田原市全体を想定しており、最終的には大きな範囲で歴史的なものも含めてかなり小田原市全体に関わる郷土への認識と愛着ということでやっていたが、これは学びの進展によって変化していくものだと考える。小さいお子さんが最初にきっかけを持つのは手を引かれて地域のお祭りやどんど焼きに行くことであり、学校の郷土学習の時間に学び、それが年齢が上がりいろいろな学習をすることによって、より地域に対する認識を深めていく。今回の答申の骨子ではそこまで書ききれないが、恐らくそれ（地域に対する認識）は学びの進展によってエリアや深さが変化するものだと考える。

また、東日本大震災の被災地では、故郷に戻れない人たちが地域の結びつきを確認するのに、郷土芸能が重要な機能を果たしているということで、積極的にそれを取り入れて復興支援活動をしているところもあるので、そういう点では郷土芸能なども重要なポイントになると思う。平穏な状態で日常的であれば、今申し上げたような年齢的や段階的に、それはやはりアクセスしやすいきっかけから始まって、本人の成長とともに学びが深まっていくということだと思う。それが何か書ければ良いが、書くのは難しいかなと考えている。

【深野委員】 「まちづくりに伝統文化を生かす」とあるが、地域でまちづくりとは言わ

ない。まちづくりだと小田原市でという意味になると思うので、まちづくりではなく「地域コミュニティづくりに伝統文化を生かす」という表現にしたほうが、今の諸星部長の話とも合う気がする。

【佐久間委員】 2点意見がある。「(2) 学習のアクセスを広げる」では、高齢者や身体障がい者の人たちは確かに自治会が把握し、お声掛けをしてくださっていると思うが、最近増えている精神障害、なかでも発達障害の人たちには地域の人は働きかけがしにくく、そうすると狭間に放置されてしまい、誰が声掛けするのかと言う問題になる。「さまざまな理由によりこれまで学びと関わりのなかった人たち」とあるが、「さまざまな理由」とはどんな理由なのか、「人たち」とはどんな人たちなのかを明確にしていけないといけないと思うので、これも課題の中に付け加える必要があると思う。

「(4) 公共心を養う」で「活動資金を集めるための活動を行える場も必要である」とあるが、公共心を養うという視点の中に、活動資金を集めるための仕組みを考える、があるのは違和感を感じる。中村副議長が循環型の仕組みを「(1) 学習意欲を喚起する」に書いたらどうかと話をされていたが、財源確保の仕掛けも(1)に入れるのもアリなのかなと考える。といのは、私も学ぶ側のニーズと財源確保をまとめて解決できる仕組みはないかと考えていて、これを踏まえた学びの場を考える必要があると思ったので、検討してもらいたい。

【木村議長】 まちづくりも行政からのお金を当てにしないで自分たちで捻出しようと考えている。だから何でも行政にやってもらうのではなく、年1回のバザーを年3回にしようなど、自分たちで考えて自分たちでやっている。財源は貰えばもらうほど行政側からのプレッシャーが掛かる。これぐらい資金が足りないから、こういう事をやって資金を集めようと知恵を出してやっていくのがまちづくりであると思う。行政をあてにしていけないというわけではないが、行政とは一本線を引いて、自分たちでやるのがまちづくりである。行政も限られた予算しかないのだから、我々地域の人たちもそれだけの覚悟を持ってやっていくのがまちづくりだと思う。

精神障害についての話が出たが、地域にとっても相手から言ってもらわないと(存在が)分からない。行政に聞いても個人情報だから絶対に教えてくれない。住んでいて顔は知っているのだから声掛けしてもらえれば手は差し伸べられるので、地域のかたのほうから自治会長などにこういう人がいるから声を掛けてほしいと言ってもらう方法でなければ自治会は把握できない。その辺りは社会教育の分野でも考えていかなければいけないというのは分かっているので、今回の答申ではできないが、今後掘り下げていくということをご理解いただきたい。

【佐久間委員】 今話に出てこなかった高齢者や、精神障害も含めた障がい者以外のかたで、これまで学びに関わってこなかった人にはどういう人たちがいるのかを明確にするということも課題も挙げたら良いと思う。「(2) 学習へのアク

セスを広げる」の課題のところを追加してもらいたい。来期への課題になるのかもしれないが、どういう人がいるのかわからなければ地域の学びとつなげられないと思う。“ニーズ”にしる“さまざまな理由”にしる、何となくはわかるが曖昧である。答申ではこういう言葉にせざるを得ないと思うが、それをまた来期以降に具体化していかないと実際に行動していかないと思うので課題に挙げていただきたい。

【生涯学習課長】 来期以降はまだ明確になっていないが、今回できる範囲のなかでは課題の中でどういう人が対象かを把握する必要があるという点については、何かしらの言葉で残したいと思う。ただ、現実問題としてそれが把握できるかどうかは難しいと思う。

【中村副議長】 1つ答申に書けることとすると、「3. 地域における学びの場のあり方の方向性」につながるが、部署を超えた連携をする等といったことが書いてあるが、例えばニーズで言うと、マズローが生理的5段階の学習意欲について挙げている。一番下の段階が生理的欲求で、そういうのは福祉の部署と関わる必要があると思うし、次の段階の安全の欲求では、防災の部署と関わっていく必要がある。その上の段階は社会的欲求、すなわち所属の欲求だったと思うが、それはやはり地域づくりの部署と関わっていく必要があり、その次の承認の欲求は、循環型社会を作っていくような企画の部署と関わっていくことが必要で、最終的には自己実現の欲求だったと思うのだが、それが学びである、という構造を見せながらいろいろな部署と関わっていくということなのかなと考えていた。

部署を超えたコーディネートが社会教育の役割としてできるといいと思う。

【笹井委員】 小田原市の現状を見ると、お互い様の関係、地域コミュニティがすごくしっかりしていて、クリエイティブな活動をやる能力を持っていると思うので、“お互い様の関係を作る”ということ「2」か「3」のどこかに書けないか。公共心のところか方向性のところかはわからないが、小田原市だったらできるのではないかと思った。お互い様の関係が発展すれば、それは結局“共助”の関係になると思う。共助が軸になっているコミュニティを作ることが大事で、生涯学習や社会教育はそれが可能な政策ツールだと思う。そのように書くことで、例えば高齢者や障がい者などを助けるという論理も出てくると思う。(高齢者や障がい者等については)行政がある種のリストとして持っても公にできないし、目に見える支援もしづらなので、それは共助の領域に任せて、それを充実・強化していくという方が良いのではないか。

【木村議長】 知的障害や身体障害のかたを自治会長がやっとなつかめるようになってきた。

それは役所から教えてもらうのではなく、長年かけて民生委員や地域の人たちと、やっとなつかめる関係ができてきたというところで、すぐできる

わけではない。その辺りは個人情報の問題があるし、もう少し心を開いてくれると支援はできるのだがと思うのだが、なかなかそこまで掘めないというのが現状である。なので、この答申のあとの次（次期）の答申で掘り下げていったら良いのではないか。

- 【生涯学習課長】 次回の諮問がどうなるかはまだわからないが、逆に前回の答申でその辺りの話はそれなりに触れていると思うので、今回の答申で改めてそこを深堀することもないのかなと思う。むしろ今回いただいた諮問が場のあり方についてなので、ある程度そこにボリュームを置いた答申にしないと思っているので、その辺りのバランスを見ながら書いていきたいと思う。
- 【木村議長】 では最後に、「3. 地域における学びの場のあり方の方向性」について、ご意見をいただきたい。
- 【中村副議長】 何を一番言いたいのかよく分からないのだが、どこに重点を置くのか。
「(1) 活動の連携を図る」というところでは、共助と公助がすごく大事になってくると思う。共助はもちろんやらなければいけない、というかそれをやれるような仕組みを作るのだが、そのためには公的にやる部分が必要で、そこで部署を超えた連携を具体的に書いていくのがいいのではないかという気がした。また、活動の連携を図るためにこの答申でできるというか、一番やりたいことはどれか。それを考えないと生かされなくなるのではないか。
- 【生涯学習課長】 もともと諮問では、場のあり方について意見をいただきたいという中で課題を整理すると、3で挙げた3点が方向性として残るのではないかと考えた。
- 【中村副議長】 なんとなくだが、「(2) 施設の拠点化、連携を図る」だと、どうしても施設は今後減っていく方向になると思う。その中でどうやって共助のしくみを作っていくかという、「(1) 活動の連携を図る」がすごく重要になると思う。(2)でなくなってしまふものを補うための仕組みをきちんと書かないと社会教育が難しくなっていくだろうなと感じた。
- 【生涯学習課長】 ご発言いただいたとおり、こういった財政問題ですので、人口問題や少子高齢化などさまざまな社会情勢を踏まえると、施設、とくに公共施設においては集約や統廃合をこれから具体的に考えていかなければならない。そういう状況の中でソフト面をどう機能させていくか、より充実させていくかというのは確かにハードの次に重要なところなので、「(1) 活動の連携を図る」については、もう少し書き込む部分があるかもしれない。
- 【中村副議長】 (1)が一番重要だと思うので、「(2) 施設の連携、拠点化を図る」→(3)多目的施設を充実させる」→「(1) 活動の連携を図る」の順番に変えたほうが良いと思った。
- 【深野委員】 この3点は、3本の矢みたいに独立しているように読めるので、(1)に入る前に今課長がおっしゃったようなコンセプト、すなわち拠点作りが重要だが、同時に拠点の中でどう運営していったら、地域自身がソフト面をどう

やって充実させていくのが重要である、というようなコンセプトを書いて、(1) (2) (3) と書くと分かりやすい気はする。

やはり、公助や共助の考え方が入っていることが大事で、場づくりと言ってもソフトを充実させなければいけないと言うのが非常に重要な方向性だと思うので、その考え方を最初に書いたほうが良いと思う。

【木村議長】 施設や場がないとまちづくりは進まない。活動の連携というのはできてこればいろいろな団体間の交流は広がっていくのだから、一番の問題は場が欲しいというのが皆の願望だと思う。場があって、多目的な施設を充実させ、それができれば活動ができると思う。

【中村副議長】 場は必要だと思うが、人材やつながる人がいないといけない。それをどうするかを書けると良い。地域にはいろいろな人材がいて、学校にはコーディネーターや民生委員や児童福祉委員等がいるが、そういう人たちをどうとらえていけばいいのか。

【木村議長】 活動のトップというのは馬鹿になった方が良い。そういう人がトップになって、周りの人に助けてもらってやる方がうまくいく。

【文化部長】 行政的には、行政がこの問題に横断的に取り組むということを実現する、ということが指針になると思う。学校との関係性も含めて、地域に入っていけば福祉や防災などさまざまな部局が関係していく中で地域の学びがあるということからすれば、今の状態では例えば地区公民館の補助金を出す仕事を生涯学習がやっているという状態の中で、必ずしも役所全体で横断的に地区公民館を見ているわけではないという現状がある。地域コミュニティ組織を作ってもらって地域に横串を通してくださいと言っている割には、役所が一番横串が通っていないので、私としてはそこが一番の問題だと思う。場づくりという点では、やはり大きな投資をもちや施設にできないこともあり、また地区公民館もそれなりに長期間積み立てをしてきた地域でなければ建替えをするのもままならない状態の中では、施設そのものは確実に減っていくしかないと思う。そうすると、既存の施設でいかに有効に使うか、そのためにはやはり生涯学習施設と言うくくりだけでなく、学校を含めていろいろな施設を、その意味では学校の役割は非常に重要になってくるし、ただそれは少子化で施設が空いているから場所だけ貸してほしいというのでは学校側も困るわけで、それをどう運営していくかや、防災の拠点として学校も避難所になっているが、運営自体をどういう仕組みでやるのかということも含めて議論しないと学校も困る。もう一方では地域が学校づくりに参加するという関係（コミュニティスクール）もできつつあるので、その延長上で色々なものが見えてくるかなと思うので、私としては、いかに行政が行政の役割を明確にして、より横断的に総合的に地域にきちんと向き合えるかが今回の話の一番のポイントと考えている。

【中村副議長】 それだと納得ができる。そうすると「(1) 活動の連携を図る」の5点目、

6点目が重要になると思う。5点目は部署を超えた連携というところで公助の話になってくると思うし、6点目はコーディネーターやリーダーの仕組みを公的にどう作っていくかをポイントに置いて書くといいのではないかと思う。

【生涯学習課長】 承知しました。本日の議論内容をまとめて骨子を修正し、一度お見せし、概ね理解をいただいたら、それをもとに今度は文章化し、またそれも次回の会議の前に見ていただく、という流れにしたいと考えている。

【木村議長】 そういう段取りでいきたいと思う。とりあえず（内容については）皆さんで了解いただいたと思うので、あとは事務局でまとめて送っていただければと思う。